１．指定物件の表示及び所有者

指定区分	有形文化財
種　　別	建造物
指定名称 及び員数	住吉神社唐門　　１棟
所 在 地	福岡市博多区住吉三丁目１番１５号
所 有 者	宗教法人　住吉神社　　代表役員　横田 豊

２．概要

住吉神社は福岡市博多区住吉に所在する式内社で、底筒男神、中筒男神、表筒男神の３柱を祀る。筑前国の一宮でもあった。起源は不詳ながらも、元慶２（878）年、寛仁元（1017）年などに朝廷からの奉幣が相次いだことが記録から読み取られ、古くから信仰を集めていたことが分かる。現在の本殿は元和９（1623）年、黒田長政が寄進、建立したもので、国の重要文化財に指定されている。

唐門は本殿の南東約 20m の所に所在する。聞き取りによれば、この唐門は昭和 60 年まで現在地より南西 100m 程の南門付近にあり、昭和 60 年の遷宮に際して現地に移築された。また旧地に所在した際には塗りが無く、移設に際して朱塗が施されると共に、屋根の檜皮が葺き替えられたとのことである。

３．構造形式

木造、正面１間１戸平唐門、檜皮葺、正面 2.27m（7.5 尺）、側面 1.06m（3.5 尺）、南面

４．特徴

門を構成する柱は切石の礎石上に設けられた石製礎盤上に建ち、礎石間には切石の地覆石を据える。柱は禅宗様の円柱で上下に粽が付き、虹梁（裏は楣造り出し）、頭貫、木鼻、

台輪が取り付く。背面に控えの方柱が建ち、柱と斜めに入れた足固１本、貫３本で円柱と繋がる。組物は台輪上に大斗絵様肘木、中備は詰組。柱に前後二重に絵様付きの差肘木。上下の差肘木の間には２列の巻斗が付き、上の差肘木上には巻斗秤絵様肘木が載り、桁を受ける。虹梁と頭貫の間には中央に宝珠もどきの飾板が付く。軒は疎らの輪垂木上に木負、茅負、裏甲、蛇腹板からなる檜皮軒付である。棟は熨斗３段の上に紐付冠瓦、両端に鬼瓦。妻の破風には猪目付兎毛通しが付く。柱など主要部分は朱塗が施され、懸魚や差肘木、破風板の各小口は黄色に、絵様の線刻は墨で彩色されている。

両脇に瓦葺の格子袖塀が付くが、これは移築に際して整備されたものと見られる。また破風の一部や茅負、裏甲、懸魚も風蝕が少なく、修理時に取り替えられたものであろう。現況では檜皮の損傷が著しい。

細部の様式から見ると、18 世紀末から 19 世紀初頭の建立と考えられる。柱間は 7.5 尺、柱太さは 1/10 の 7.5 寸で、唐破風の曲線を含め伝統を踏まえる一方、虹梁の裏は楣を造り出すという工夫が見られる。

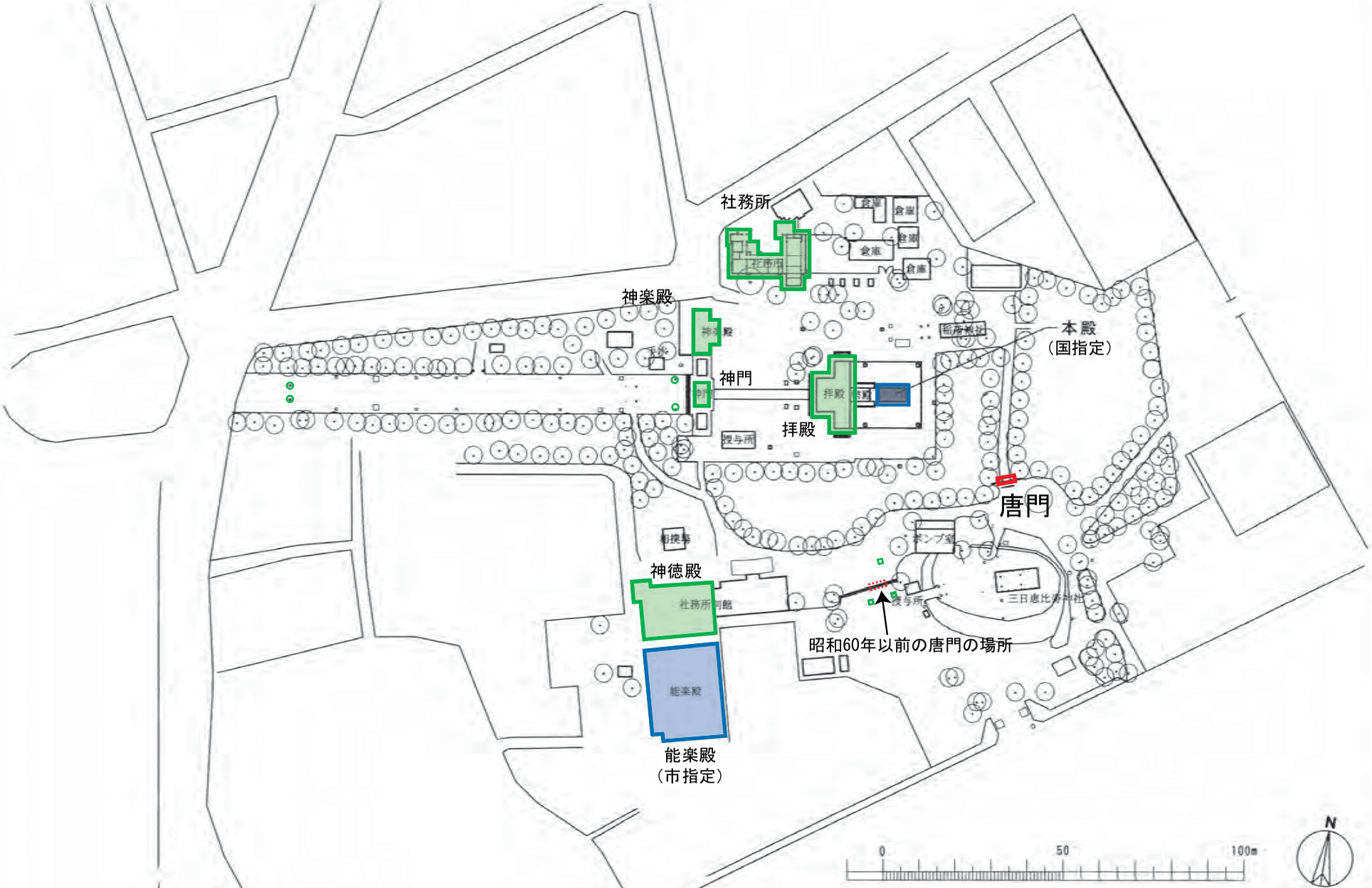
５．その他

『筑前名所図絵』（奥村玉蘭：文政４〔1821〕年）や『筑前國続風土記附録』（加藤一純・鷹取周成：寛政５～ 11〔1773 ～ 1779〕年）に描かれた境内絵図には、社殿前の中門に平唐門が描かれている。建物の屋根は、瓦葺と檜皮など植物質のものが明らかに描き分けられており、平唐門は植物質の屋根となっている。年代的な観点からは、この唐門が当該遺構である可能性もあり、来歴を知る上で重要な手掛かりといえる。

６．指定理由

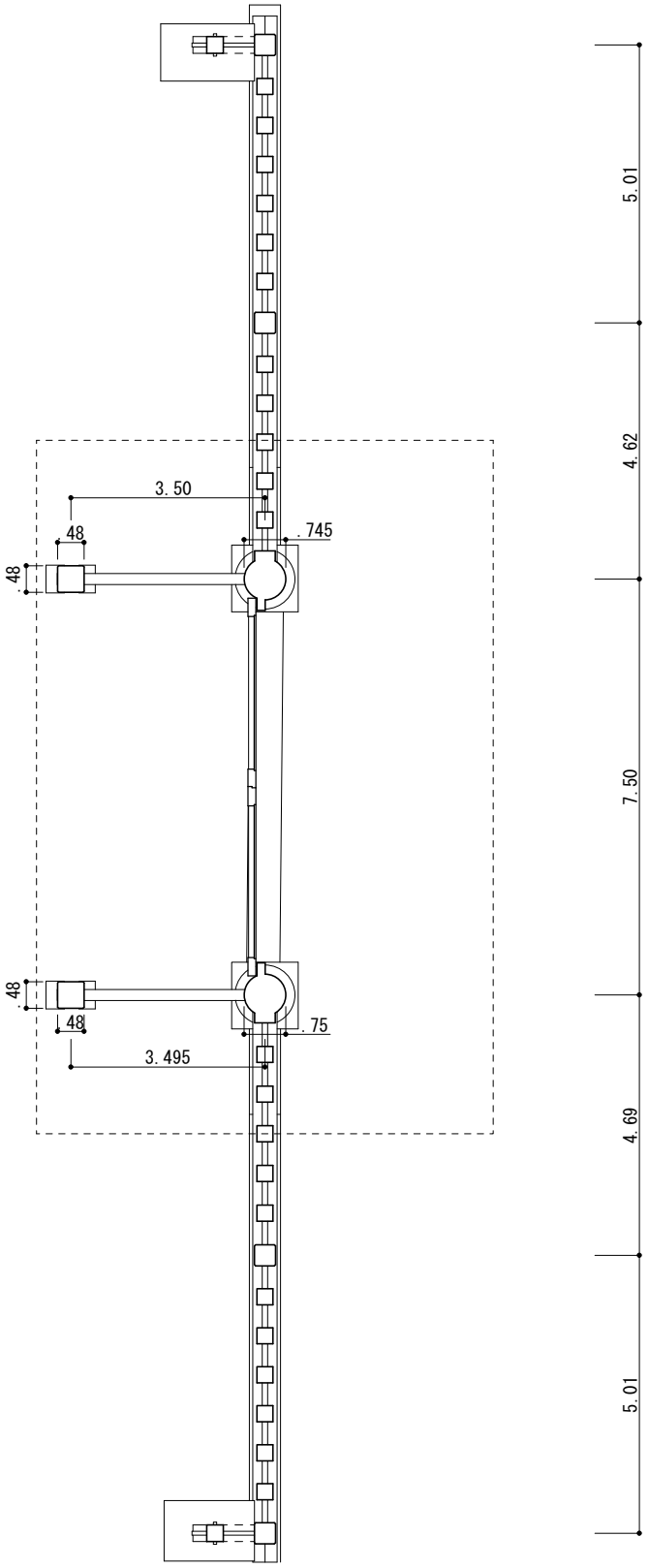
昭和 61 ～平成元年に行われた市内の社寺調査では、近世に遡る門遺構は 20 例ほどが掲載されているが、その多くは切妻屋根の薬医門や四脚門である。唐門は名島城の遺構を移築したとされる崇福寺唐門（16 世紀後期）、聖福寺開山堂唐門（宝暦 12〔1762〕年）、同じく聖福寺唐門（18 世紀後期）が知られているが、いずれも向唐門である。平唐門としては博多区善導寺の 19 世紀前期と見られる脇門が、垂木の形状から、かつて唐門であったと考えられるが、現状では大きく改変を受けて切妻屋根となっている。

住吉神社の唐門は、市内で当初の姿をとどめる唯一の平唐門であり、近世社寺建築としての価値は高く貴重な建造物といえる。



住吉神社境内図面

都道府県	福岡県	重要文化財　住吉神社本殿	
図面種類	配 置 図	縮尺	1/1500
図面調整	（財）文化財建造物保存技術協会		



単位：尺
縮尺：1/40

平面図

正　面

背　面

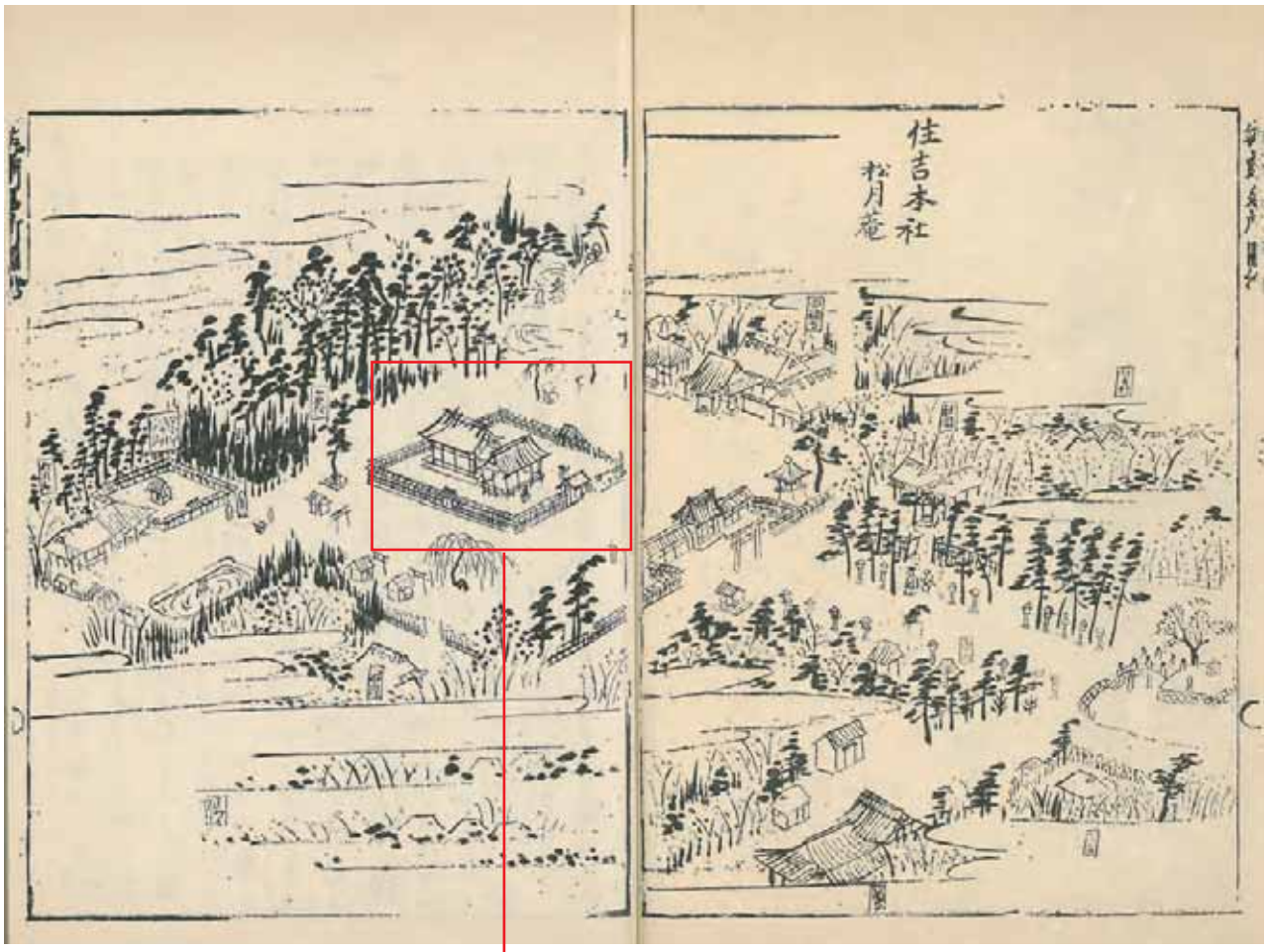
妻部分

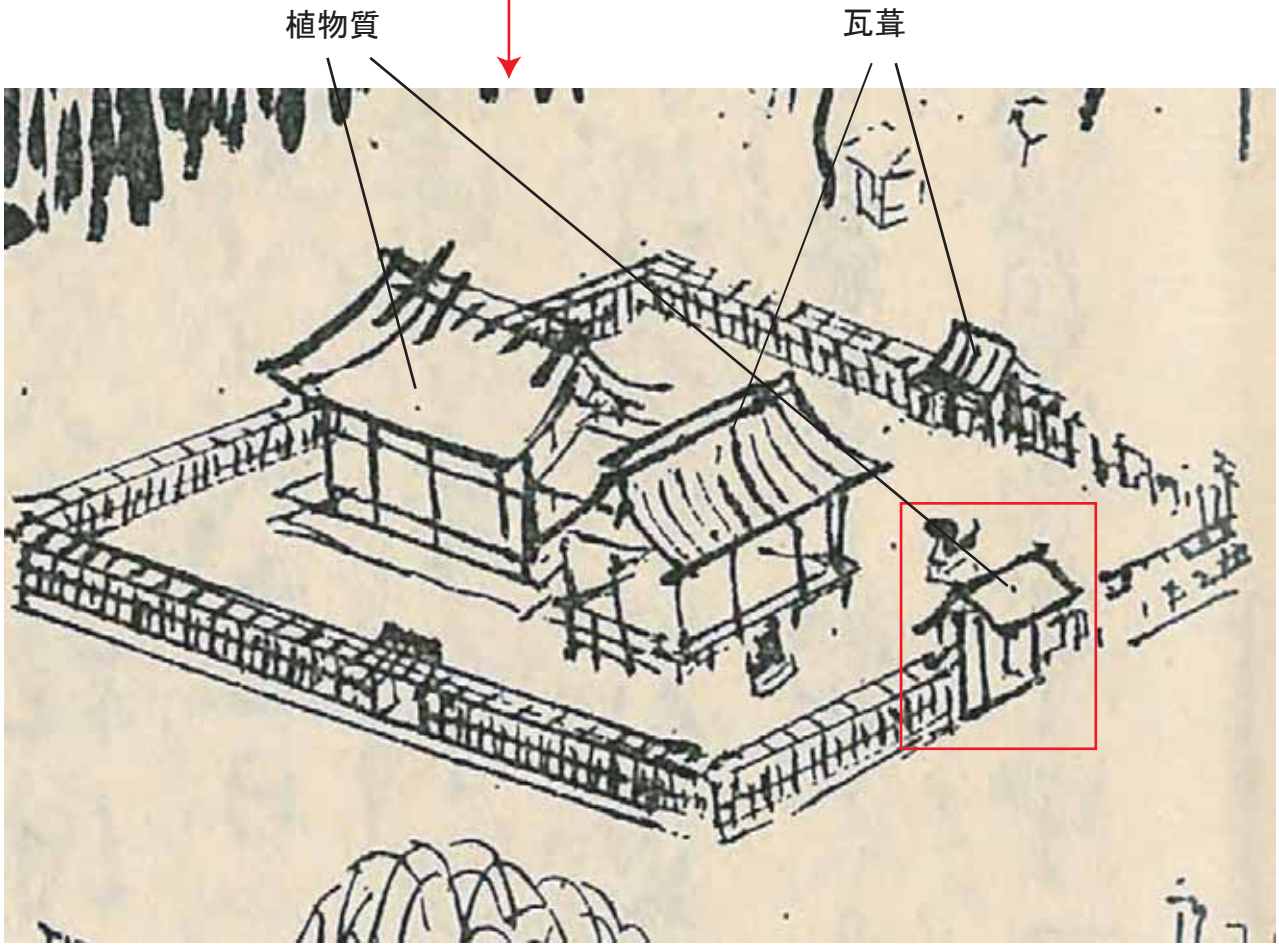
化粧小屋裏

虹梁絵様（上：背面・下：正面）

木　鼻

中備飾板





『筑前名所図絵』（文政４〔1821〕）に描かれた近世の住吉神社境内